

技師八田與一と烏山頭ダムのこと

古木守靖

FURUKI Moriyasu
フェロー会員
土木学会専務理事

会員の皆さんは烏山頭ダムや八田與一という名前を聞いたことがありだろうか。

2001 年末、台湾の土木水利工学会に出席し、その機会に烏山頭ダムを訪れることができた。

烏山頭ダムは、堤防の延長 1 273 m、堤の高さ 56 m、体積 15.4 万 m³の巨大なアースダムである。ダムでせき止められた水量は約 1.5 億 t、受益農家は 15 万戸、また灌漑面積 15 万 ha はほぼ香川県の面積にも等しく、灌漑水路の総延長は実に 1 万 6 000 km に達するという日本では想像できない規模のものである。また、ダムがせき止めた人口湖は、その形が珊瑚のように見えるところから珊瑚潭とよばれる（写真-1）。

母を日本人にもつ明時代の英傑鄭成功によって本格的に拓かれた古都台南に一泊。翌朝、台南市の北東方向にある烏山頭ダムに向かった。新しくできた第二南北高速道路を使って、六甲インターから 10 分ほど、台南からは 40 分ほどの距離だ。

このダムと灌漑施設を調査・計画し完成させたのは八田與一という土木技術者である。彼は、1910（明治 34）年に東京帝国大学土木工学科を卒業して、内務省入省後、ただちに台湾に渡り、烏山頭ダムをはじめ台湾の土木事業に目覚ましい実績を残し、1942（昭和 17）年フィリピンに向かう途中で乗船していた太陽丸が米軍の魚雷攻撃により撃沈、56 歳という短い一生を終えている。

当時、日本の統治下にあった台湾の開発のため、なかでも特に水事情が悪く荒地のままだった丘陵地・平地を開発すべく、ダムと灌漑用水の計画が八田氏を中心に立



写真-1 烏山頭ダム堰堤と珊瑚潭

てられた。そのシンボルともいべき大事業がこの烏山頭ダムであった。ダムは、当時国内はもとより海外にも例の少ない大規模なアースダムで、セミハイドロリックフィル工法とよばれる特殊な工法を採用し、灌漑施設とあわせて約 10 年の歳月をかけて 1931（昭和 5）年に見事に完成した。この用水は、嘉南大圳とよばれた。八田氏の発案による三年を周期とする配水方法（三年輪換作とよぶ）と組み合わせて、嘉南大圳は順調に運営され、嘉南平原は肥沃な大地に変貌、人々の生活は見違えるように向上した。

当時、台湾は瘴癘（マラリアのような、気候・風土による伝染性の熱病（岩波「国語辞典」による）の地として敬遠されていたが、八田氏は妻外代樹と 6 人の子供と生活をともにしながらその任にあたった。日本人にも現地の人にも分け隔てなく接して事にあたった彼は、仕事の鬼として恐れられると同時に、その人柄ゆえに土地の人々から愛され、そして尊敬されたという。

事業中の犠牲者は、従業員とその家族も合わせて 130 名と記録されている。その多くは、導水トンネル工事中のガス爆発による 60 余名を除くと病死であるという。この慰霊碑には、この 130 名の名前が誰彼の区別もなく、亡くなった順に記されている。彼が書き下ろした碑文は、文学者も絶賛する名文でその霊を慰めている。

現地では、地元嘉南農田水利会の顧問の徐さん（75 歳）が、達者な日本語を操って案内して下さった。八田技師とは直接の面識はないものの、当時を知る数少ない方で、それゆえに水利会の顧問をされている。娘さんが日本人と結婚され、時々東京に行かれるという。大変に几帳面な方で八田技師の経歴を簡潔・的確にレポート用紙 5 枚にまとめられている。帰り際に「参考にしてください」と美しいペン字で記された資料のコピーをいただいた。

右岸側、ダムを見下ろす丘の上に、八田技師の銅像がある。作業ズボンに作業靴、作業服の姿で地面に腰を下ろし、右膝を立て、右手で頭髪をつまみ思索顔の技師の生きた姿である。金沢の高名な作家による作品といわれ、芸術作品としても優れたものである（写真-2）。

われわれが徐さんから説明を受けているときも、地元の若いカップルが見学に来ていた。付近一帯が有料の公園として整備され、昨年にはダムの放水口の脇に、故郷金沢の方々の支援により八田技師の記念館が建設されていて、見学者はゆかりの品々やビデオ等を見学することができるようになっている。

ところでこの銅像は数度にわたる没収の危機を、水利会の人たちによって護られて現在に至ったのだという。最初、銅像は水利会の人々のたつての希望で 1931（昭和 6）年に現地に設置された。しかし、1944（昭和 19）年には、日本軍によってすべての金属の供出命令が出され銅像も供出されたと思われていた。ところが誰かの機転で密かに“かくまわれ”、蒋介石総統の死後、戦争の傷跡も癒えた 1981（昭和 56）年に、水利会の人々の手によって再び同じ場所に据えられたのだった。

八田技師は、1942（昭和 17）年 5 月 8 日に新しい任務を帯びて大型客船太陽丸でフィリピンに向う途上、東



写真-2 八田與一の銅像後ろで、案内いただいた徐さん（右側）と筆者。

シナ海において米軍潜水艦に撃沈され遭難する。その葬儀は、故郷金沢だけでなく、第 2 の故郷烏山頭でも多くの人々が参列して行われた。墓は銅像のすぐ後に造られている。戦争中台北から台南に疎開して、終戦後もなく夫の後を追って入水自殺した奥さんの外代樹さんとともに眠っている。

今でも毎年命日である 5 月 8 日には、水利会の人たちの手で慰霊祭が行われている。現地の人々は、今の自分たちの幸せな生活を支えるダムと水路を造ってくれた人の恩を決して忘れていないのだ。さらに、最近、土木水利工学会で選んだ台湾の 10 大土木遺産の一つに、烏山頭ダムが選ばれたという。台北でお会いした台湾土木水利工学会の幹部の方々は誇らしげに、八田技師のこと、セミハイドロリックフィル工法のことなどを私たちに語ってくれた。八田技師は、死後 60 年経た今もこの地で人々の心の中で生きている。あるいは永久の命を授かって生き返ったのだ。

名声を求めず台湾の開発にその命を捧げた不世出の技術者の強靱な魂と高い志、女学校を卒業するとすぐに八田技師の元に嫁ぎ、その技師を支えて、夫の死後間もなく烏山頭ダムの放出口に身を投げてその後を追った外代樹夫人の一生、70 年もの昔の偉業を忘れることなく語り継ぎ、その恩に感謝して慰霊祭を営む台湾の方々の心。すべてがわれわれの心を深く打つ。

昼食を終えて、六甲インターから高速道路に入ると、左手 1 km ほどの山懐に抱かれるように、今は自然の一部になったかのような烏山頭ダムが目に入ってくる。この嘉南平原に八田技師を中心に展開された逝きし人々の営みの証と、現在に生きる人々がもちつづけている報恩に心うたれつつ烏山頭を後にした。

台湾では現在 2005 年の開業を目指した新幹線の工事が始まっている。また台北では世界一の高層ビル、世界金融センタービルの工事が進められている。

この日本から 3 時間ばかり離れた南の島で、報恩の心と建設の息吹に触れることができ、心豊かになる思い出が一つ加わった。

なお八田技師のことは黄文雄『台湾は日本人がつくった』（徳間書店）に台湾建設に貢献した数多くの日本人の一人として紹介されている。また、古川勝三氏になる『台湾を愛した日本人』（青葉図書）は土木学会著作賞を受賞した名著で八田技師の人となりが詳しく、生き生きと記されている。ぜひ本誌読者のみならず日本人に読んでもらいたい本である。さらに最近（財）全国建設研修センターから『土木の絵本 海をわたり夢をかなえた土木技術者たち』という本が発刊され、その中でも青山士・久保田豊と並んでわかりやすく記述されている。

（2002 年 1 月 30 日・受付）